

『忘れないために。

私たちにできることを。』

『Search for 3.11』というプロジェクトをご存知だろうか。これは、ヤフー株式会社が、3月11日の0時から23時59分まで、「Yahoo!検索」で「3.11」と検索すると、1人につき10円をユーザーに代わり寄付するというものだ。

戦後70年を迎えた2015年は、東日本大震災からも月日が経過し、震災当時の記憶の風化が大きな問題として取り上げられた。そこで、ヤフー株式会社ではこの課題を解決するため、「3.11、検索は応援になる」をテーマに、多くの人が3月11日という日にあらためて当時の事を考え、被災地に想いを寄せていただくことを目的として2014年に初めてこのプロジェクトを実施した。

このプロジェクトを通じて、普段はなかなか行動に移すことができない人でも、「検索」という行動を入り口に、被災地に対して関心を持った人は多数いるだろう。今回は、早稲田大学において、被災地支援を行なっている団体の職員や学生を訪れることで、その人たちの想いに触れ、「震災」×「風化」というテーマについて考えていきたい。



この度は、WAVOC職員の鈴木さんにWAVOCから見た学生ボランティアについて、お話を伺った。

鈴木 護さん (WAVOC職員)



～大学の使命としての社会貢献～

—まずボランティアセンターの名前について、「平山郁夫記念」となっているのはどのような意味があるのでしょうか。

平山さんは日本画家なんですよ。東京芸大の学長をされていて、また早稲田大学の名誉博士でもあったので、まったく早稲田と繋がりが無い人ではなかったんです。2002にここ（平山郁夫記念センター）が立ち上がったわけなんですね。これには大学の役割である教育、研究、これはもうすでに行われている、と。そこで第三の役割としての社会貢献もきち

んと何か施設を設けてやっていきたいと思いますということで、当時の総長と平山先生が話しをされて。平山先生はもともと社会貢献活動などをされていたので、平山先生に是非お名前を頂きたいということで「平山郁夫記念ボランティアセンター」となったんです。

今はお亡くなりになられたのですが、平山先生の意志を継いで社会貢献活動を大学の使命としてやっていこうということで、現在も運営されています。

今はお亡くなりになられたのですが、平山先生の意志を継いで社会貢献活動を大学の使命としてやっていこうということで、現在も運営されています。

～終わりなきボランティア活動～

—震災後、WAVOCは復興支援に力を入れてきたと感じますが、これにはいつまで続ける、というような目処はあるのでしょうか。

大体、復興支援を軸とした取り組みは5年間って言われていたんです。東日本大震災復興支援室というものができて、そこが取り纏めて5年ぐらいが目処でした。その活動の目的は三つあって、一つ目が、被災学生の支援で、家が流された子や、ご両親をなくされた方の支援が主です。大学に行きたい子に関しては授業料の免除などが挙げられます。二つ目が、被災地の支援。当初ならガレキ処理、復興にむけたイベントの支援などです。これは継続していまもやっています。そして、三つ目が研究を通じた復興支援。たとえば、防災に対する町づくりとか、都市計画を通じた支援。この三つが、大学を通じた被災地支援の柱となっています。我々のところは、被災地の支援に特化しています。大学としては大体5年が目処だったんですけど、ボランティアセンターとしては特に期限は決めていません。ニーズがある限りは、学生さんが主体で続けていきたいです。

～学生とボランティア～

—震災があってから登録者やボランティア団体や数は増え続けていますか。

いや、(今は)減っています。

起った年はすごい数だったんですが、やっぱりみんなの関心が薄れていくので、それにともなって右肩下がりで減っていますね、震災ボランティアに関してですが。それ以外のボランティア数は、コンスタントですね。

—どれくらいの方がこのボランティアセンターに登録しているのでしょうか。

約三〇〇〇人ぐらいですかね。一八歳以上であれば誰でも登録できるというのが、このセンターの特色なんです。

—ということは早稲田生以外も？

そうそう。早稲田の学生に限らず誰でも登録できます。早稲田の学生が多いけど、一般の人、他大学の方も入られていますよ。その内訳はわからないのですが。

—「メーリス」もありますよね？

はい。あれも早稲田生以外も登録できるようになっています。登録すればWAVOCから、単発のボランティアの紹介などのメールが届きます。WAVOCのサイトでもメンバーやイベントへの参加者を常に募集しています。

—私は2年になって、ボラフェスを機に今の気仙沼チームに入ったのですが、ワボックの存在自体まだ知らない人が多い印象を受けます。WAVOCの認知度を上げるような活動には取り組まれているのでしょうか。

新入生に対しては、ボランティアフェアが最初にWAVOCを知ってもらえる機会ですね。他にはたとえば、ウェブだとかチラシだとかで、「ボランティアフェアに来てください」と呼びかけてブースに来てくれた学生が興味をもってくれたらなと思っています。あと、新入生向けに配られる資料に「ボランティアセンターでこんなことができますよ」って説明は書いているんですよ。ただ入ってすぐにボランティアをやるというのは、ハードルが高いと思うんです。なので、ある程度時間が経って、夏休みぐらいに新しいことを始めたいと思って入ってくる学生は結構いるんですよ。

—現在WAVOCの下で震災復興活動をする者の人数は足りていると感じますか

もっと人数は増やしたいですよ。一時期、登録者数が多い時もあったんですけど、皆さんも卒業されてしまうと早稲田ネットのアドレスが使えなくなってしまう訳ですよ。それを一旦整理して、いまは三〇〇〇人ぐらいが登録しています。ただ、三〇〇〇人が登録していて、こんな活動がありますってメールで流しても、人が集まるイベントもあれば、全く人が集まらないのもあるので、そういった点で、この3000人っていうのが多いのかはわかりません。だけどもっと分母（人数）は増やしたいとは思っています。なので、もっとみんながやってみたいなど魅力を感じてくれるような活動をつくれれば、メーリングリストに登録してくれる人も増えるでしょうし、それをみて実際に活動に応募してくれる人が増えるとは思います。

—ボランティアに参加する人が今後維持、もしくは増えた場合、実際、現地に行ってやることはあるのでしょうか。行ってみてもやることがあまりないということも今となっては多いかと思うのですが…。

震災直後も「側溝の泥をこれだけしか取れなかった。私が行った意味なんてあるのか。」と自問自答した人はたくさんいました。でも、行くだけでありがとうと喜んでくれる人がいるわけですよ。だから求められているとは思っています。実際に呼ばれるイベントの数はあまり減っていないですからね。ボランティアセンターとしても、復興のお手伝いをしたいという想いはずっとあります。ただ、やり方が、いままでは大学が主体でやっていますが、ずっと続けていくに当たっては学生が主体になってやって行く必要があると思っています。学生が主体的に考えて行動する方が、我々がこれをやって、あれをやってと頼むよりも、新しいアイデアが出るし、現地の人も喜ぶと思うからです。自分たちが主体的にやっていた方が、楽しいだろうし、またいきたいと思えるだろうから、そういう気持ちでやってもらいたいと思っています。まあ受け入れてくれる方もボランティアの扱いの慣れている人ばかりではないですからね、段取りが上手くいかないというような問題もたくさんあると思います。

一人によってボランティアに対するモチベーションは違うのですが、なんとなく入ったメンバーも積極的に取り込んでいくべきなのではないでしょうか。

ボランティアをする上で、何が一番大切かっていったら、やっぱり自主性なんですよ。ね。(ボランティアは、) 自主的なもので、無償なもので、公共性があるものなどいくつか定義として挙げられるものはあるのですが、やっぱり一番大切なのは自分がやりたいからやるっていうスタンスだと思うんです。だから、高校の部活とは違って、「やれ」って言われて無理矢理やらせるのはボランティアではないと考えています。チーム内での温度差はしょうがないものです。自分のやりたい時に、やりたいことをやるのが大切だとは思っています。だから、気仙沼チームのメンバーと話していても同じような悩みを抱えているけど、そのように話しています。なにごとにおいても、一律に皆が同じ想いでやるのは難しいですね。

—鈴木さんがこれまで学生たちが活動する様子を見てきて、何か思うことはありますか

やっぱり喜んでもらった時は嬉しいですね、こちらも。でも勘違いしてはいけないのが、色々なところで活動すると、「早稲田さんありがとう」と言われるわけですよ。でも、その“早稲田さん”っていうのは、実際に行った学生さんに向けての言葉であるので、それは僕自身勘違いしてはいけないと思っています。あと多くの学生さんが主体的にやってくれて、非常に嬉しいのですが、学生さんにも勘違いして欲しくないのが、自分一人の力でそのボランティアができているのではなくて、何かやろうとすると必ず受け入れてくれる人がいるんだってことです。たとえばご飯を作ってくれる人とか、送迎をしてくれる人とか。実際、被災地の方が、ボランティアのためのボランティアをしている側面もあるので、それは忘れないでいて欲しいです。

—最後に、「風化」についてはどうお考えですか。

「風化」ねえ。主体的に動いていこうという人がいる一方で、どうしたらいいのかわからず動き出せずにいる人もいます。関心がなかった、または中学生だったから当時は何もできなかったけど今は何かできることをやりたいと思っている人は結構いるんです。なので、そういう人たちを積極的に巻き込んで、風化させないようにしたい、というのがここ(ボランティアセンター)の願いですかね。

—ありがとうございました。

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター/WAVOC

平山郁夫記念ボランティアセンターは早稲田大学の一機関として二〇〇二年四月に設立。

三つの理念—「社会と大学をつなぐ」、「体験的に学ぶ機会を広く提供する」、「学生が社会に貢献することを応援する」—の下、早稲田大学の社会貢献の推進役として活動を続けてきた。

大学では、二〇年後の創立一五〇周年の姿を示した【Waseda Vision150】を策定しているが、その1つとして、「世界に貢献する高い志をもった学生」の育成を掲げている。これは世界中から集まった学生が、「主体的に社会問題に気づき、考え、行動し、現場体験の知と学術的な知をつなげること」により、卒業後はグローバルな視点で社会に貢献する人材となることを期待するものだ。

WAVOC ではこれから先の十年も、一人でも多くの学生たちが、さまざまな分野のグローバルリーダーとして羽ばたいていけるよう、さらにボランティア関連科目やボランティアプロジェクトを拡充していきたいと考えている。

こうしたWAVOCの思いの下、震災から4年経った今も、震災復興支援活動を続けている学生団体がある。今回は、陸前高田に密着した復興支援活動を続けるチーム陸前高田の幹部二名にお話を伺った。

境 薫子さん(副代表兼幹部)

渡辺 花野子さん(幹部)



～ボランティア活動への思い～

— 実際にボランティア活動を初めて心境に変化はありましたか。

境さん：ボランティアという活動内容については特に心境に変化はないです。ただチームに1つ上の代がいなくて、代替わりして幹部になると、チームの運営、調整を一機に任されるようになり、責任の重さを実感するようになりました。ちゃんとボランティア活動を自分たちで行うとなるとやはり大変なんだなというのを思い知りました。

— ボランティアを求める声に変化を感じたことは？

境さん：チーム陸前高田ができた時は既にながれき撤去はもう終わっていたので交流をメインにした活動を行って来ています。仮設住宅訪問に関しては来られるならもっと来てほしいと伝えられるし、その声に変化はないです。ただチームの活動の中心となっている学習支援の受け入れ先であった一般社団法人の方で担当者が変わってしまったこともあり、これまでの関係が崩れてきてしまっているのは大きいですね。元から東大と早稲田でやっていたのですが最近あまり声がかからなくなってきています。

— 復興は進んでいると感じますか。

境さん：行くたびに新しい建物が増えていてハード面での賑やかさは戻ってきていると感じます。

けどソフト面、精神面については仮設住宅訪問で触れ合っているお年寄りの方々に変化はあまり見られないよね。

渡辺さん：街で歩いている人とかあまり見ないね。街の活気という面では震災が起きた時に近いと（地元の方も）おっしゃっているので今の段階で外からサポートする人が居なくなるのはやっぱりまだ早いと思います。

— もっとボランティアが向かうべきだと思いますか？

渡辺さん：多すぎては向こう側の負担も増えてしまったり、感傷してほしくないところもあると思うのでたくさんの方が行けばいいというのではないと思いますね。

— 今後の活動についてどのように考えていますか。

境さん：本当はチームで来てくれない子にもっと来てほしいと伝えたいです。

渡辺さん：少し適当にやっている感じがして少し悲しくなる時があります（苦笑）

境さん：たとえ中途半端な気持ちであっても現地を訪問して人と交流して楽しいのは事実であって、どういう気持ちで行くにしても、行き先で喜んでもらえるのも自分のためになるのも事実なんですよ。だからたとえ中途半端な気持

ちであっても来てほしいと感じます。これはチーム内のみの話ではなく、被災地に行ったことがない人みんなに伝えたいですね。ほんとに今後の活動についても考えなくてはいけない時期が来ているんだと感じます（苦笑） これまでもじわじわとその感じはしていたのですが今この問題に直面せざるを得ない時期にきていると感じます。ただ最近新しく入ってきてくれた子がいるので、一新したいという思いはあるし、数年は続けたいと思っています。陸前高田から自分たちに求められることにできる限り取り組んでいきたいです

WAVOC チーム陸前高田

現在チーム陸前高田に所属する人数は一五人。だが実質活動しているのは七一八人（うち三人が幹部）を務める。

インタビューに応じていただいた2人とも九州出身で現在政治経済学部の子生。九州では一ミリも揺れず、震災の実体験や肌で感じるものが無く、大学に入ったら一度自分の目で見たいと思っていた。チーム陸前高田を選んだ理由は、チームが発足二年目と若く、これからチームを作る過程に携われると思い、一から作り上げる部分に興味を持ったためであった。

WAVOCは今後も復興支援活動を続ける団体を支援する体制を整えてくらしつつあるが、実際に活動する学生団体の方にも、思う様に活動ができなくなってきている現状が見えてくる。最後に、鈴木さんもおっしゃっていた、ボランティアを受け入れてくれる側の声を聞いた。

熊谷 俊輔さん

（気仙沼観光コンベンション協会誘致推進課課長）

～風化について考える～

—復興はどのような場面でどの程度進んでいると感じますか。
復興・・・何なんですかね、復興って。少なくとも復興にはインフラや経済などなど、色んな分野があるので一概には言えないなあと考えています。ただ、復興への意識も風化していると最近は感じています。



—「風化」をどう考える、もしくは考えるべきだと思いますか。

日々の生活の中で人間の記憶から様々な事項が風化してゆくことは脳の機能からみても、人間の慣習からみても仕方がないことだと思います。が、他者がメディア等の情報伝達ツールを使って、その部分を操作することには違和感を感じています。また、人が生きていく為に必要な情報（災害への対処等）は常にどこかに保管され、状況に応じて活用される、その様な仕組みは必須と考えています。風化しても仕方がないこと、してはいけないことを明確に分けることが必要だと思います。

どこが復興の目標なのか、最終地点になるのか。その判断も含め徐々に風化しうやむやにされてしまっている。そう感じています。世の中に（日本で）は、うやむやになってしまうことって本当に多いんですよ。

～地域間や世代、立場を超えた交流～

—学生のボランティア活動の取り組みを受け入れていることについて、今後はどのようなことをお考えでしょうか。一人一人の学生との出会いはとても貴重な体験です。自分が考えていることがまだまだ未熟で途上であることを思い出させてくれます。年を取るとどうしても思考が固くなってしまいうよう（もちろん個人差がありますが笑）。絶対に正しい考えではないとわかっていながらも、受け入れることができちゃう。年なのか経験のうえでの判断なのか、まあそのどちらもなんだろうなあ、と諦め受入れております（笑）みんなの思い、活動から大きな学びや力を頂いています。

今後の活動はその様な地域間や世代、立場を超えた交流が一つのキーワードになるのかな、と考えております。ともかく、社会奉仕の意識はより良い社会を目指すのであれば必須の事項であると思います。

—自世代の経験をどのような取り組みを通じて次世代に伝えていくことができるでしょうか。

非常に難しい質問だと思います。どの様な形で伝えることが効果的かつ目的を遂げることができるのか、まだまだ思案中です。また、経験のすべてを語り継ぐのではなく、人として生きたうえで何を形作り、社会に残せていけるのか、今はそのことを重要と考えています。

—最後に、2020年東京オリンピックがやってきますね。国民の中にも、この話が出た頃は被災地の復興を心配する声が目立っていたと思うのですが、今と今日オリンピックについて国のムード、姿勢に、何か感じられるものはありますか。

経済的な理念に侵されすぎていると思います。人間の性質上、資本主義が社会発展に上手くフィットしたところがありますが、そろそろそのより上位の社会を模索する必要があると感じています。貧困や戦争、今回の震災の被害にも今の経済主義からのひずみが原因として。経済が回れば良い、そんな基本理念で回っているオリンピックの一連の出来事は私は嫌いです。

などなど、なんとなく小難しいことを考えているような感じですが、私も今の力では地域（気仙沼）に係るだけで精一杯ですね。どこまでやれて、どこまで変えられるのか、若い人たちに何を残せるのか。考え続ける必要があるなど感じます。

—お忙しい中、お時間いただきありがとうございました。

気仙沼観光コンベンション協会

食彩豊かな町気仙沼。特定第三種漁港の気仙沼漁港を有する気仙沼市も、東日本大震災で大きな影響を受けた地域の一つだ。気仙沼観光コンベンションセンターは観光業関係者等によって組織された、当地域の観光振興を目的とした団体。

水沼が所属するWAVOC気仙沼チームが2011年の発足当初からお世話になり続けているご縁もあって、この度は被災地の現場の最先端で活動を続ける誘致推進課課長の熊谷様にお話を伺うことができた。

—自身のボランティア活動の経験を通じて思うこと—

(WAVOC 気仙沼チーム 水沼 里衣)

私自身今のボランティア団体（気仙沼チーム）に入った時、ボランティアというもの自体にはあまり興味を持っていなかった。ただ海外の友達から「日本大丈夫？」と聞かれるたび「私のいるところは大丈夫」と答え続けていた時、自分の住むところと被災地を全く切り離して考えていたことに気付いた。そのことに、違和感を感じ、実際に被災地に行って自分で行って見てみよう、気仙沼チームに入ってみたのが始まりだった。実際に活動をしていくなかでも「人助けをしている」というような感覚はなく、ボランティアという活動を通じて様々な経験をさせてもらったという感覚が強かった。それだけ、こちら側が被災地の方々元気をもらってきた。

今日も気仙沼では仮設プレハブが密集した復興屋台村などの居酒屋でいつもお客さんを温かく迎えてくれるおやじさんやおかみさんたちがいる。元気を取り戻している被災地もあるが、他方で震災の爪痕の深さは未だ感じさせられざるをえない。今回のような何百年かに一度の大規模の被害は、予想できなかったといえ、ここまで被害が広がる必要があったのか、そしてその復興にこれほどの期間を要する必要があるのか、改めて考える必要性を感じる。

私が初めて仮設住宅に訪問した際にお話を伺ったおじいちゃん言葉は今も心に強く残っている。「人間が想像できることはいずれ起こる。それを超えるものが起こった時にどうすべきか、そのヒントを得るには今回のように想像を上回った出来事から学ばなくてはいけない。私は目をそらしてはならないと思う。」—

「想定外だった」そう片付けてしまってはならない出来事だった。あっという間の出来事だったがそれが奪って行ったもの、残して行った影響は甚大であった。

5年が経とうとする今、あの時の出来事は既に「記憶」と化したのだろうか。

私たちはあの日から今日まで、何を学びいかに行動してきただろうか。ふと立ち止まり、考えなおしてみる。

—必要なサポートを、必要なときに、必要なひとに。—

(早稲田大学 石口翼)

震災直後から大勢のボランティアが被災地域に集まり活動したが、一年も経過しないうちに「災害の風化」あるいは「被災地の風化」とでも言うべき関心の喪失が進行し、約10ヶ月後の被災3県（岩手県、宮城県、福島県）では、災害ボランティアセンターを介して活動する人の数はピーク時の約1/10にまで激減した。東日本大震災に限らず、災害・事故・戦争経験などの記憶はいつか忘れ去られてしまうのだろうか、そのような疑問を抱いていた時、「search for 3.11」のプロジェクトリーダーの方とある講演でこのようなことを言っていた。

「風化とは、忘れ去ることではなくて、もうできることはないと思い込んでしまうこと」

この言葉を聞いた時、まさにその通りだと感じた。毎年、3月11日を迎えると日本各地では黙祷が捧げられる。その風景がニュースでも取り上げられる。年に一度ではあるが、全国民の中にある震災の記憶は甦り、忘れ去られることは決してない。ただ、すでに復興しているだろうと思い込み、支援を止めてしまった人は多いのではないだろうか。

震災直後に必要であったものは、今となっては必要ではない。月日が経過する毎に必要なものに変化していつている。「いま、何が課題で、どのような人が困っているのか」を考え、支援し続けることが今の日本には必要である。